

あ と が き

○足利会長から編集子に寄せられた「イランからの書簡」を、非礼をも顧みず、あえて彙報欄に敬載させていただいたが、思い出されるのはモンテスキューの“Lettres persanes”。その一節に曰く *Je trouvai, il y a quelques jours, dans une maison de campagne où j'étais allé deux savants qui ont ici une grande célébrité. Leur caractère me parut admirable. La conversation du premier, bien appréciée, se réduisait à ceci: ce que j'ai dit est vrai. La conversation du second portait sur autre chose: ce que je n'ai pas dit n'est pas vrai, parce que je ne l'ai pas dit.* と。しかしこの書簡の末尾とは逆に、会長の「書簡」Ⅲの末尾は記されないところに余韻無量なるを想わせ、そのおみやげ話が30年の昔とも対比されて余人の追隨を許さぬものであろうことを約束している。○さてその足利会長の停年御退官記念に特集された本号——創刊以来、殊に活字印刷となってからは No. 10 を除く毎号に惜しみなき御援助をいただき、その額も今や数十万円に及び、その御厚情の万一にもお応えしようとして企画特集された本号である。しかも、目下基金募集中の御退官記念事業会においても、先生の御希望を体して、わが西南アジア研究会を助成対象の筆頭にランクされている由、かえすがえすも感激の至りである。こうして、ますます意義深い本号であるが、まず巻頭に、オリエント学の発展に御尽瘁中の日本オリエント学会会長三笠宮殿下を東都学界から「客員執筆」の形でお迎えすることができたのは望外の光栄である。また足利先生御自身にも、イランへの御出發を前に最もお忙しいなかを、進んで御寄稿いただいたが、これは、中原先生の場合と同じく、学問の道には停年退官などありえないことを示されたものであろう。それに加えて、編集部のお願いを快諾してお寄せいただいた諸先生の珠玉10篇の御論考が、足利会長の学徳を讃えて、燦然と輝いているのは、会員諸氏と共に御同慶の至りである。○ここまではよいことづくめであるが、さて心配なのは編集技術の未熟——折角の御高論を不測の不備で台なしにしているのではないかと……。実を申せば編集部は全くの手薄となって孤軍奮闘といった形。編集長羽田明教授はパリに、大黒柱の吉田光邦助教授はイランにあり、加藤一朗助教授と編集子とがルス部隊。輔佐の恵谷俊之氏もイラン行きで不在。手近かにおられるのをこれ幸いと小野山節氏を専らの相談相手に、勝藤猛氏の応援も仰いだが、中でも副会長織田武雄先生の並々ならぬ御援助など、いずれも感謝の外はなく、またいろいろな注文にも快く応じられた「あぼろん社」社主伊藤武夫氏の御協力も忘れがたい。こうして出来上がってみると、普請衆力ということをしみじみと感じさせられる。○本号もそうであるが、物心両面の諸縁に支えられて本誌は大きく成長した。今さらに思い出されるのは、創刊当時の大きなビジョンである。足利・宮崎・中原三先生が創刊号にお寄せいただいた序言が、これを余すところなく伝えている。足利会長の序文からうかがってみると

……この地球上における多種多様な諸文化に対するわが国の学問研究の現状は、これで良いと

あとがき

言う程度の満足すべき状態には残念ながら未だ到達せず、否むしろ放置してあると言うのが実情である。学問の先端を行き最高峰を示すべきわが国大学の講座や研究所を見ても、この方面に対する科学研究は決して世界一流の国家なみとは断じて言うことを得ない。……特にわが学界が今なおその確立を怠っている方面は、西南アジアの文化圏についてである。二十世紀後半の歴史に必ずやこの西南アジアの民族や国家の活動が刮目せらるべきことは、今日の世界情勢の動きから見ても我々が確信して読み取られるのであって、その意味においてもこの地方の組織研究はわが国民にとって実に焦眉の急と言わねばならぬ。この地方の文化の大宗をなすイスラム教に関して一講座すら有しない大学は、けだし文化国家の大学として世界の笑い物であり、これは正に恥辱に近い。東南アジアより印度へ、ペルシア・アラビア・トルコ、更にエジプト・イスラエル・メソポタミアに関する学問的研究は、人類としても当然追究すべき重要な課題であって、われわれもそれらの研究に参加すべき権利を持っている。……

わが京都大学西南アジア研究会は、わが国における以上の如き学問欠陥の分野に一步を踏み込み、学生と教官の共同の研究の場として成立したものである。自然系と人文系とを問わず、苟くも西南アジアにあけるあらゆる事象に興味を有し研究せんとする人士の来り会する自由闊達な会合である。多数の参加者を望んで已まない。本会は、その研究の性質上常に現地についての実証を必要としている。日本の水とアラビアの水とではその味が違う。それは経験者のみか知り得ることであろう。……

とある。会員のかたがたが、直接本会会員としてではなくても、相次いで西南アジアの各地を現地調査されて輝かしい成果を挙げていられるのも意義深いことであり、会長のビジョンは異なった形においてではあっても、大局的には実現しつつあるのではなかろうか。本誌今後の歩みにも併せ考えて、いっそうの努力精進をつづけたい。○ふりかえてみれば、本誌も No. 10 につづいて二度目の特集であるが、さらに次号は同じように御縁のふかい宮崎市定先生に同趣旨の特集が予定されていると言え、一つの壮観であろう。先生がたが相次いで京大の講壇を去られるのは惜別の情にたえないが、本誌がその機会を空しくしないですむことは、ありがたいことであり、せめてもの慰めでもある。こうして、事、西南アジア研究に関しては、この企だけをみても、本邦希有の業とも謂うべきか。欧州学界の一角から本誌に欧文レジュメの要請が来ているのも理由のないことではなさそうだ。そうした必要は早くから痛感しているところだが、諸般の態勢が十分に整う日を切に待望している次第。○本号「オリエン特研究特集」成るについて感あり：「雨風の降りしきるとも築きにし わが詩の城はやぶれざるべし」(フェルドウシー)。 [編集部記]